
われら！桜ヶ丘高校吹奏楽部

十四万宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

われら！桜ヶ丘高校吹奏楽部

【Zコード】

Z3263D

【作者名】

十四万富

【あらすじ】

この春、はれて私立桜ヶ丘高校に入学することになった俺、九条春樹は、幼馴染の巴真樹奈、腐れ縁の北沢涼とともに吹奏楽部へと入部する。そこで待っていたのは個性豊かな部員達だった！？

プロローグ（前書き）

御覧になつてくれてありがとうございます。十四万字と申します。
私は実際に打楽器をやつしていましたが、金管や木管はやつたことが
ないのでその辺りは（練習風景など）想像で補っています（笑）な
ので、おかしいと感じる点などありましたら指摘して頂けると助か
ります。では、至らないところが多くあるとは思いますが、どうぞ
お楽しみください。

プロローグ

届いてくれるといいな

君の分かんな」ところで

今、僕も

奏でてるよ

M r . c h i l d r e n
「 s i n g 」よつ

一話・春の朝

春眠、暁を覚えず。

とは上手い言葉だ。さすが、昔の人はいいことを言つ。

実際に体験すると分かるが、春の暖かい日ざしに包まれながら心地よく目を覚まし、顔を洗い、歯を磨くなんて並大抵の精神力ではこなせるはずがないのだ。

そして俺はそんなに強靭な精神力を持ち合わせていない。

つまり、一度寝をするといつ結論に至るわけだ。

ではおやすみ。

グッバイ、太陽。

萌

「くおーらー！春にいーなに一度寝してんのー！」

ガバッ！と布団を剥がされる。

春樹

「つまつー寒ひー。」

今年の春は寒いらしい。

萌

「春にい、今日始業式でしょー？もう八時過ぎてるよー遅刻だよー。
ち・じ・くー！」

あーそりゃ。そりゃええば今日は始業…

春樹

「つまつー！…それを早く言わんかー！」

萌

「さつきからずっと言つてましたけどー？もつ外で真樹奈さん待つ
てるんだから早くしてあげたら？

私はもう行かないといけないから…

じゃーねー！

「

そつ言い残すと萌はピュン！といった感じの勢いで部屋から出ていった。

さて、着替えながら萌について説明しよう。

九条萌。俺の一個下の妹。桜ヶ丘高校に近い場所にある美咲中学に通っている。ちなみに、俺と真樹奈も同じ出身。

毎朝起こしに来る。

まあなんだかんだいって兄が起きるまで家にいてくれるんだから良い妹なんじやないかと思つてゐる。

あれ、下のズボンどこいった？

身長は低め、つていうか服だけ替えれば小学生で通るんじゃないだろうか。

部活は手芸部。

暗いところと雷が苦手。

好きなものはパフェと猫。

俺が知つてるのはこのくらい。

さてと、行きますか。

朝飯は気合いでカバーするとして、昼は学食でいいか…。金あつたかなあ?

玄関を出たところで声をかけられた。

真樹奈

「もうっつー遅いよー? 今日は始業式なのに…」

春樹

「まあまあ…。そんな怒るなよー。近いんだから早歩きしちゃば全然間に合ひつて。」

真樹奈

「何言つてるの〜!! 始業式は普通の時より30分早く行かなきゃいけないって先生が言つてたでしょ!」

いや、自業自得なのだが。

朝から走ることになった。

…はい。

真樹奈

「当たり前でしょーー！」

春樹
…走る？

…。

こんな時間まで俺を待つていてくれたのは誰なのかとこりと、俺の家の隣に住んでいて、幼馴染もある、巴真樹奈だ。

夜は窓越しに会話なんてことはないから変な妄想はしないでいた

だきたい。

いや、少しあはするか…。

部屋は向かいだと聞いておもくが。

俺と同じく美咲中学出身。

ていうか生まれた頃からほとんど一緒に過ごしてきた気がする。うん、だから幼馴染なんだけど。

小学校から中学校までずっと同じクラスだった。

唯一離れたのは中学の時、俺は陸上部だったけど、真樹奈は吹奏楽

部だったこと。それくらいしかない。

小さこ頃は俺にベツタリだつた氣がする。

思えばあの頃は可愛かった……。

……いや、今でも十分に可愛いんだが。俺の傍におこなへのが勿体ないくらい。

なんだれつ、感覚の麻痺？

ずっと傍にいるとその本当の価値に気付かない、って言ひやん?

今だつて、さすがにベツタリまではいかないが、結構一緒に居る時間は多いほうだと思う。

女の子つていつもは、妹みたいな感じだな。

でも、それはあつちも同じだらつ。

最近は高校に入つたら吹奏楽部に入るよつてーと、しつこい勧誘が続いている。

入つてやつてもいいと思つたけど、陸上部に入るかどうかで気持ちが揺らいでいるのが現状だ。

真樹奈

「ねえ、まだ朝ご飯食べてないでしょ？」

走りながら真樹奈が聞く。

春樹

「うん答ー。」

真樹奈

「冗漫して言つてじやなこのーのーえど、サンデイッシュならあるナビ、食べるー。」

春樹

「おーーさすが真樹奈ー。」

真樹奈

「朝の余りだから気にしないで、食べるの？」

春樹

「じゃ、遠慮なく。」

「む、やはり真樹奈のサンデイッシュは面かった。」

桜ヶ丘高校前

真樹奈

「はつ、はつ、疲れたあ……」

春樹

「良かつた。間に合つたな。」

真樹奈

「な、なんで平氣なの！？
…十分くらい走りっぱなしだったのに…。」

ゼエゼエと息を乱しながら真樹奈が聞く。

春樹

「おま、当たり前だろ。
俺、中学三年間長距離の選手やつてたんだぞ？これでもエースだ
ぞ？」

真樹奈

「そつか…そだつた…。
でも、高校は吹奏楽部に入るつて…。」

春樹

「はいはい。後でな。」

真樹奈が「ふーふー」言つてたような気もしたが、気にしない気にしない。
い。

この後、クラス分けを見に行つたらまた真樹奈と同じクラスだった。

…やっぱなんかあんのかな。

そしてクラスに滑り込み、出席も終えて、始業式に向かつた。

面倒なので省略。

校長

「え～私は毎日玉葱を五個食べています」

校長

司会進行役の教師

「え、これにて始業式を終了」とします。3年生は後ろから、2年生は前から出なさい。

：1年生は少し待つているよ。」

ん？

春樹

「なあ 真樹奈。」

真樹奈

「うん。何があるのかな？」

春樹

「いや、俺も分からん…。」

待つこと五分。

司会進行役（？）の生徒

「では、これより、新入生歓迎会を執り行います！」

こうして俺を桜ヶ丘高校吹奏楽部に導いたイベントが始まったのだ
った。

一話・春の朝（後書き）

文才が無くてすいませんです。たゞそく萌と真樹奈が被りそつた気がします。更新頻度は一週間に一回くらいです。見守っていただけたら幸いです。では、今後もよろしくお願ひします。十四万富

一話・三人よれば

なんぢやねん！…

…

柔道部の下らないエセ関西弁漫才はまだ続いている。

真樹奈

「えと、次はパソコン研究部だつて」

春樹

「ん、ああ…」

名前の順で並んでいたはずなのに、何故真樹奈がこんな前の方にいるのかすぐには分からなかつたが、周りを見渡すと、理由はすぐに分かつた。

やはり、美咲中からの進学者が多いためか、皆自由に固まり始めていた。俺の知っている顔も何人か見つけられる。

後で声かけにいこう。

真樹菜

「次は、鉄道研究部だね。」

気が付くともうパソコン研究部の紹介は終了していた。

「新入生歓迎会」
は、要するに
「新入生勧誘会」
といふことらしい。

新しく入ってきた新入生の興味を引くために様々なパフォーマンスを披露するのだ。

それが柔道部の場合には漫才であったり、パソコン研究部の場合には妙なマジックショーであったりするわけだ。

つまり、まったく部活と関係ないことをやっても、面白ければOK
といふ雰囲気の中進行していく行事らしい。

鉄道研究部が終わったところで、何だかもう飽きててしまった俺はついつらと舟を漕ぎ始めた。

真樹菜は真剣にいろんな部活紹介を見ているが、俺にはとても出来ないぜ…

今日の朝、寝坊したってことつまり昨日の夜寝てないわけで…

でもこの部活紹介はつまらないわけで…

僕は眠いわけで…

眠るわけで…

?

「よお、やつぱー一人はいつもペアだなー」

ここにはついて…

真樹菜

「あ、涼くんーおはよー！」

涼

「おはよー、真樹菜ちゃん＆春樹くん」

春樹

「君付けすんな、気持ち悪いから」

北沢涼。

幼馴染といふか、腐れ縁といふか…

真樹菜と一人じゃないときは三つも三つペアになるのは俺で、三人ペアの時も大抵は、

俺、真樹菜、涼である。

涼とは小学校からだが、同じクラスになつた小一の時からずっとつるんでいる。

クラスじゃ違えど、長い間付き合つてゐる。

やつぱり、腐れ縁といひやないだろ？か、ここつぱ。

中学の時は俺と回り陸上部で、いつも短距離のHースだった。

で、まあ、ここはそれなりにモテた。

てこりかかなりモテた。

：いいもん、俺には真樹菜がいるもん。

やつぱり幼馴染つていいもんだな。。

俺はモテた、ところには微妙で三回ほど本命のチョコをもらつたぐらいだ。

まあ全員丁重にお断わりしたが。

真樹菜からのチョコは数に入れてない。

なんていうか、本命ではないし、毎年貰つて俺もお返しする、とい

うのが当たり前になつてあるからだ。
その日だけは俺は羨望の視線を集めむ。

なぜなら…。

真樹菜もモテるからだ…

中学三年間で五十人斬り。

宮本武蔵もびっくりだぜ！

いかん、興奮しそうで動悸が…

救心飲まなきや…

真樹奈

「…ねえ、聞いてるのー?」

春樹

「おわっ!」

不覚にも呑みたえてしまった。

真樹奈

「やつぱりボーッとしてた…

…あのねえ、涼くんが吹奏楽部に入るんだって！」

春樹

「へえ、マジか？

てか、なんか楽器出来んのか？」

涼

「ああ、マジだ。いつ見ても俺はマリマーなんだぜ？」

春樹

「初耳だな…」

十五年目の真実。

真樹奈

「よしーじゃあ春樹も吹奏楽部に入…」

春樹

「まあまあまあ、ひょっと考えさせてくれよ…」

「れは…、ヒツカベキなんだろ？…

真樹奈

「絶対入らなきゃダメだからね～」

春樹
うへん

司会

「最後は、吹奏楽部です

一話・三人よれば（後書き）

打ち切りあるかもです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3263d/>

われら！桜ヶ丘高校吹奏楽部

2010年11月16日18時44分発行